那須野が原博物館　中期目標項目・評価シート
第2期（平成29～令和3年度）

令和元年度

中期目標の項目	中期目標の内容	評価指標		3年度目標値(5か年)	期間実績合計	元年度目標値	元年度実績	備考
1．収集・保存・活用								
1-1　資料の収集	収集方針をもとに採集・寄贈・購入等を通して積極的かつ継続的に資料を収集します。	新規収集資料件数	採集・購入他(全分野)	1,460件	1026件	292件	342件	
			1.歴史	400件	257件	80件	92件	塩原温泉関係資料ほか
			2.民俗	25件	49件	5件	8件	双六ほか
			3.考古	0件	0件	0件	0件	
			4.美術	10件	13件	2件	6件	高久靄厓巻子、錦絵ほか
			5.文学	25件	27件	5件	5件	塩原関係作品ほか
			6.地学	50件	35件	10件	19件	昆虫、デスモスチルス、復元模型ほか
			7.植物	150件	30件	30件	30件	市内採集措葉標本
			8.昆虫	750件	541件	150件	162件	クワガタムシ、チョウほか
			9.動物	50件	74件	10件	20件	鳥類1件、哺乳類3件、両生類16件
			寄贈(全分野)	―	6,175件	―	2,820件	歴史2,134件、民俗28件、文学1件、美術10件、地学1件、昆虫646件
			合計	―	7,201件	―	3,162件	
		収蔵資料総件数		―	85,536件	―	85,536件	R2.3.31現在 歴史22,553件、民俗6,116件、考古4,284件、文学82件、美術3,932件、地学692件、植物5,079件、動物42,798件 除籍：民俗40件
		新規収集図書件数	購入	150件	59件	30件	21件	
			寄贈	―	―	―	304件	
		収蔵図書総件数		―	17,087件	―	17,087件	除籍：1,068件
1-2　資料情報の公開	収蔵資料データベースの公開を行い、研究者等による利用を促進します。	収蔵資料情報公開件数		5,000点	3,913点	1,000点	1,168点	実績：民俗405件、美術117件、昆虫646件 総公開件数：29,954件
1-3　資料の適切な管理	収蔵庫・展示室を良好な環境に保ち、燻蒸により資料の安全な保存を図ります。	燻蒸回数	那須野が原博物館	5回	3回	1回	1回	
			附属施設	5回	3回	1回	1回	黒磯郷土館
	資料の修復等を行い、資料の保存状態を改善します。	資料の修復	歴史資料	25件	27件	5件	6件	掛軸や書簡等の修復
			考古資料	15件	5件	3件	0件	
			美術資料	25件	16件	5件	2件	油彩画の修復
			常設展示	―	―	―	1,027件	
			企画展示	2,500件	2,167件	500件	518件	昆虫化石展335件、南展38件、縄文展145件

中期目標の項目	中期目標の内容	評価指標		3年度目標値(5か年)	期間実績合計	元年度目標値	元年度実績	備考
1-4　資料の活用	常設展示・企画展示等による資料の利用・公開を促進します。	展示利用数	トピックス展他	750件	739件	150件	266件	トピックス展189件、なはくAS23件、日本遺産54件
			黒磯郷土館	―	1,242件	414件	414件	
			日新の館	600件	245件	120件	0件	H31.3.31施設廃止
			関谷郷土資料館	―	1,440件	720件	0件	H31.3.31施設廃止
	収蔵資料を他の博物館・美術館等へ貸し出します。	貸出資料数		―	197件	―	55件	ﾓﾆｭﾒﾝﾄ1件、化石21件、歴史5件、民俗21件、考古2件、美術5件
【特記事項】	特別展・企画展展示資料として、塩原関係資料や化石等を重点的に購入したほか、美術分野では高久靄厓の巻子等を購入した。また、附属施設の廃止に伴い資料整理を実施した中で、重複する民俗資料のうち、著しい欠損によりその形態をなしておらず資料的価値が見出せない資料や出所・来歴に関わる情報が不足している資料40件を除籍した。図書は、収蔵スペースに限りがあることから、利用頻度が低く、他の施設でも閲覧可能な図書1068件を除籍・廃棄した。資料の公開については、民俗（食に関する資料・計405件）・美術（日本画や彫刻作品など・計117件）・昆虫（ハチ類・計646件）において実施した。資料の修復については、美術分野において油彩画（市指定文化財）2件実施した。このほかに掛軸の修復を1件・書簡等の裏打ちを5件実施した。資料の活用については、全体的に目標値を上回った。なお、附属施設の廃止に伴い、今年度から日新の館と関谷郷土資料館の展示利用数は0件となった。収蔵資料の貸出先は、ミュージアムパーク茨城県自然博物館・神栖市歴史民俗資料館・とちぎ蔵の街美術館・大田原市歴史民俗資料館・栃木県立博物館などである。							
【課題・改善点等】	新規収集資料件数は、目標値を達成した。今後も採集・購入・寄贈等により継続的に収集していく必要があり、収蔵庫のスペース不足に伴う資料の安全な保存環境の確保や予算の確保が重要な課題となっている。修復する必要がある資料として土器や美術作品などがあり、これらを計画的に修復していく必要がある。資料の公開については、部門単位で進めていくなど、積極的な情報の公開に努める。資料の活用については、引き続き企画展示やトピックス展、なはくアートスポット等において、収集した資料を積極的に利用・公開していく必要がある。							
【外部評価委員 所見】	令和元年度の資料収集について、新規資料収集の目標値は、歴史、民俗、考古、美術、文学、地学、植物、昆虫、動物の9分野中、7分野で目標値を上回り、目標値に対する実績は117.1%で、昨年度の61%を大きく上回ったことを評価したい。博物館活動において、継続して資料の収集活動を行うことは大変重要なことであり、資料の管理上、また資料を後世へしっかり伝える意味からも、収蔵庫の増設は最も必要不可欠な問題であり、これまでの計画通り収蔵庫の増設に努められたい。資料活用については、資料公開実績も年度目標値に対し116.8%と上回っている。新収蔵資料については、できる限り公開するとともに、収蔵資料データベースのさらなる公開を行い、研究者等による利用をさらに促進していただきたい。							
2. 調査研究								
2-1　調査研究活動の推進	地域に関するテーマや博物館活動に関する調査研究を行います。	那須野が原博物館紀要発行回数		5回	3回	1回	1回	
	研究成果を広く市民に還元します。	学術論文の執筆数、発表会や講演会の回数		50回	72回	10回	30回	論文4件、発表2件、講演24件
【特記事項】	那須野が原博物館紀要第16号を発行した。紀要の掲載内容は人文分野が3件（歴史）、活動記録が2件である。論文は、紀要で3件（歴史）、研究雑誌で1件（昆虫）執筆した。発表は、学会1件(動物)、談話会で1件(昆虫)行った。講演は、講義形式で19件(動物1件・昆虫1件・歴史17件)、見学会形式で5件（歴史）行った。なお、新型コロナウイルスの影響により中止となった発表が複数あった。また、学術情報検索サイト「J-STAGE」において、那須野が原博物館紀要の創刊号から第15号までのうち、掲載許可が下りた論文を全て公開した。							
【課題・改善点等】	業務における調査研究活動の時間の確保と計画的な遂行が必要である。紀要は調査研究成果の公表のために、今後も毎年1回継続して発行する。那須塩原市で実施している動植物実態調査や地域研究者等と協働・連携を図り、地域の解明に努めたい。投稿者の確保が課題となっているため、外部への積極的な声掛けを行う。また、より多くの方に活用していただけるように、紀要の発行後1年を経過した論文の公開を毎年実施していく。							
【外部評価委員 所見】	当館で発行する紀要については、那須地域で行われている調査・研究の成果を発表する場として重要な役割を果たしているので、今後も継続されることを希望する。 また、今年度は、講演会の回数が大きく増加しているが、博物館をより広く市民に知ってもらうきっかけになっていると評価できる。							
3. 展示								
3-1　常設展示の充実	常設展示の内容や展示資料の見直しを図ります。							現代美術作品の展示(なはくAS9回)、引出し展示(昆虫標本)の入れ替え、冬季における民俗資料の展示、考古資料の一部入れ替え
		企画展示の開催回数		20回	12回	4回	4回	

中期目標の項目	中期目標の内容	評価指標	3年度目標値(5か年)	期間実績合計	元年度目標値	元年度実績	備考
3-2 企画展示の開催	地域または各テーマに対する市民の理解を深める目的で開催し、資料を有効に活用します。	企画展示の観覧者数（学校を除く）	90,000人	72,761人	15,000人	17,801人	H29 30,000人／年 H30～ 15,000人／年
		観覧者の満足度（平均）	90%	95%	90%	94%	5段階評価のうち、上位2位の合計 両生類展93%、昆虫化石展92%、南展96%、縄文展93%
3-3 企画展示の理解促進	図録の発行、記念講演会や展示解説、ワークショップなどの関連事業を開催し、展示趣旨を分かりやすく伝えます。	図録の発行件数	5件	3件	1件	1件	昆虫創世記(無料配布)
		関連事業の参加率	70%	81%	70%	68%	昆虫化石展113%、南展27%、縄文展65%
		参加者の満足度（平均）	90%	97%	90%	98%	昆虫化石展100%、南展100%、縄文展95%
3-4 トピックス展の開催	資料を積極的に活用するほか、調査研究によって得られた情報を公開します。	トピックス展の開催回数	55回	29回	11回	11回	
3-5 意向調査	市民の意見を積極的に収集し、ニーズの把握に努めます。	意向調査(アンケート)の実施回数	20回	1回 H30～通年	4回	通年	展示アンケートに意向調査の項目を追加し、通年で実施
3-6 附属施設の展示	附属施設の常設展示の見直しを図ります。企画展を開催し資料を有効に活用します。	黒磯郷土館・関谷郷土資料館常設展示の見直し					黒磯：特になし 関谷：H31.3.31施設廃止
		日新の館企画展の開催回数	25回	5回	5回	0回	H31.3.31施設廃止

【特記事項】

4回の企画展示（特別展：「昆虫創世記」、移動展：「13匹のカエルと5匹のサンショウウオ」、企画展「南庄作-いのちを彫る-」・「縄文クロスロード・槻沢」）を開催。令和元年度観覧者総数：22,364人（うち学校見学3,430人）・利用者数13,720人。学校を除いた企画展示観覧者数は17,801人で目標値を18.7%上回った。特別展「昆虫創世記」は、昆虫が現在の多様性を獲得するまでの過程を、地質時代順に化石標本と現生標本をもとに紹介した。復元画や復元模型を用いて、各時代を視覚的に捉えられるよう展示した。観覧者数8,606人（目標値7,800人）。移動展「13匹のカエルと5匹のサンショウウオ」は、県立博物館との共催で県内に生息する両生類全種の生息環境や生態を紹介した。エントランスでは市内に生息する両生類全種の生体を展示した。GWを中心に多くの観覧者が来場した。観覧者数は4,284人（目標値2,500人）。企画展「南庄作」は、那須塩原市ゆかりの彫刻家・南庄作の作品を紹介した。地元の作家を再認識していただく契機となった。観覧者数は3,231人（目標値2,500人）。企画展「縄文クロスロード・槻沢」は、縄文時代の大規模な集落遺跡である槻沢遺跡にスポットを当て、槻沢に息づいた縄文文化の特徴を紹介した。土器パズルやさわれる土器などハンズオン展示を充実させたが、コロナウイルスによる影響もあり、観覧者数は伸びず、関連事業2回が中止となった。観覧者数は1,160人（目標値2,000人）。日本遺産コーナーで華族農場関連資料を展示した。

【課題・改善点等】

クイズや動画は、展示の理解促進に高い効果が得られることから、今後も取り入れることが望ましい。これまで解説パネルは、文字の数や大きさが不統一であったため、展示によってばらつきがあった。次年度以降は基準を設けて見やすく分かりやすいパネルにする。解説パンフレットやポスターは、多数の残部があった。配布方法を検討するとともに、印刷部数を慎重に判断する必要がある。企画展示の情報が、メインターゲットとなる性別・年齢層に充分に届いていない。展示ごとに広報戦略を検討し、効果を検証する。

【外部評価委員 所見】

令和元年度は、「13匹のカエルと5匹のサンショウウオ」の移動展に続き、特別展「昆虫創世記」と生物関係の展示が続いた。カエルとかサンショウウオは、子どもの関心をひき、大好きな生き物であるので、開催期間中の土・日曜日は館内は子どもたちの姿が多かった。カエル、サンショウウオ、その他の生物の生態展示もあり、いろいろと工夫された展示であった。水族館のように、子ども達が自由に様々な生物に接することはできなかったが、そのようなことを意図した展示の工夫は見られた。

特別展「昆虫創世記」は、色々な昆虫の祖先や仲間が理解できるような展示がなされたいた。エントランスホールに飾られた大きなオブジェが入館者を迎え、子ども達はどんなものが展示されてあるのか、興味関心をもって展示室に入る姿が印象的であった。しかし、色々な昆虫などについて展示説明を読んで理解することは、生物学が苦手な人には難しいのではないかと感じた。展示にあたり、展示内容・目的・方法について、視点をどこに（だれに）あてて展示するかは重要なことだと思った。

企画展「南庄作 いのちを彫る」の展示は、何度も見た。作者が地元出身で身近な人であったことが来館の思いを強くしてのではないかと思われた。この企画展では、作者の生きざまを作品を通して強く感じることができた。また、作者が彫ろうとするものに対する思いがよくわかる作品が展示されてあった。そのような作品に魅了された人たちが沢山いたようである。

2月1日から開催された。企画展「縄文クロスロード・槻沢」は、冬季のため博物館利用者が少なかったように感じた。身近なところにある縄文遺跡であったことから、大変楽しみにしていた人も多かったと思われる。この企画展については、新型コロナウイルス感染症が終焉した際には、映像等で見られるようにできるとよいと思う。

4. 教室講座							
4-1 講座の実施	研究成果を市民に還元するとともに、入門的なものから専門性の高いものまで多様な講座を開催します。	参加率	70%	58%	70%	63%	セミナー111%、なはくりサーチ14%
		参加者の満足度（平均）	90%	96%	90%	95%	セミナー89%、なはくりサーチ100%

中期目標の項目	中期目標の内容	評価指標	3年度目標値(5か年)	期間実績合計	元年度目標値	元年度実績	備考
4-2　教室の実施	博物館ならではの体験を重視し、子どもの興味関心を高める教室を開催します。	参加率	90%	81%	90%	78%	化石103%、土器53%、昆虫103%、科学47%、はたおり83%
		参加者の満足度（平均）	90%	98%	90%	100%	化石100%、土器100%、昆虫100%、科学100%、はたおり100%
4-3　親子体験チャレンジの実施	親子のコミュニケーションを深めるとともに、それぞれが楽しく学ぶことができる事業を開催します。	参加率	90%	75%	90%	71%	
		参加者の満足度（平均）	90%	85%	90%	84%	
4-4　博物館フェスタの実施	市民と協働して、博物館の魅力を広く周知する事業を開催します。	来館者数（延べ）	6,000人	3,500人	1,200人	1,100人	
		参加者の満足度（平均）	90%	88%	90%	87%	
4-5　各種普及事業の実施	ワークショップや研究発表会などの普及事業を開催します。	参加率	70%	70%	70%	77%	なはくAP77%
		参加者の満足度（平均）	90%	95%	90%	98%	なはくAP98%
4-6　生涯学習活動の支援	質問や相談等に応える業務を積極的に実施し、市民の学習を支援します。	相談対応件数	500件	199件	100件	65件	

【特記事項】

講座は一般を対象に那須文化セミナー(5回)・なはくリサーチ講座(4回)を開催。子ども・親子対象に化石発掘隊(1回)・子ども土器づくり教室(4回)・親子昆虫教室(2回)・子ども科学教室(3回)・子どもはたおり教室(2回)の5コースを実施。その他に親子体験チャレンジ(22回)・博物館フェスタ・なはくアートプロジェクト(4回)等を開催した。また、栃木県との連携事業として日本遺産に関する講演会(2回)と見学会(1回)を開催した。

セミナーは令和元年度から1つの分野に限定して開催した。講座と見学会の組み合わせが好評だった。昨年度と比較して参加率数が38%増加した。なはくリサーチ講座は、参加率14%と非常に振るわなかった。自身で調査を行うことへの関心が高まらなかったことが要因の一つとして挙げられる。科学教室は、植物のテーマで参加率が伸びなかった。親子体験チャレンジは、参加率が71%となり目標に達しなかった。なお、親子体験チャレンジ最終回及び地域研究発表会は、新型コロナウイルス感染防止のため中止となった。博物館フェスタは、開催日が連休となったため、来場者は減少した。なはくアートプロジェクトは実施回数を4回に増やした。

【課題・改善点等】

セミナーは今年度と同様に対象分野を絞って開催する。なはくリサーチは講座を休止し、参加型調査のみ継続する。子ども体験教室はテーマの設定や定員の見直しを図る。親子体験チャレンジは、チラシ誌面の変更や掲載媒体を拡充し、参加率の向上を図る。博物館フェスタは、参加率が減少している事業の見直しが必要である。なはくアートプロジェクトは実施回数を増やし、指導者をリストアップするとともに、制作物の展示を含めた多角的な展開を検討する。

【外部評価委員 所見】

⑴　多様なテーマの教室講座を多数実施するのは素晴らしいが、スタッフ要員の過重労働にならぬようテーマの絞り込みを行って適切に実施することが望ましい。
⑵　「那博リサーチ」や「夏休み子供科学教室」などで低かった参加率の要因究明をして将来に活かしていただきたい。
⑶　対象年代から、成人・親子・こどもの三対象に大別できるが、成人は高齢者、こどもは小学生が大半で、若中年層の参加率が低いのが長年の悩みである。親子対象の行事に参加する親世代の中年層を呼び込む方法は教室・講座を企画する時に有効と考える。
⑷　こども対象のテーマは固い印象がある。こどもたちの意識・価値観が時代と共に変っていくので、こどもの生活の中からテーマを探すことも必要ではないだろうか。
⑸　物館フェスタは、ニーズを探す機会でもあるので、内容の充実を図ることは意義があると考える。
⑹　教室講座の内容を再検討して、将来の計画に活かすことが必要と考える。

5. 地域との連携及び市民との協働							
5-1　市民との協働	自主団体を支援し、市民による教育普及活動を促進します。	市民に活動成果の場を提供します。					ｴﾝﾄﾗﾝｽ利用6回(個人2回・黒磯ﾌｫﾄ・田空・栃木水の会・自然調査会)
	各種機関等と連携を図り、広範囲な活動を展開します。	連携事業件数	25件	13件	5件	8件	ﾋﾞｼﾞﾀｰ出張展、ｺﾝｻｰﾄ、ﾌｪｽﾀ(ﾌﾘｰﾏｰｹｯﾄ福祉団体)、広報、県連携事業、なしお博、オーストリア展、市アート展

中期目標の項目	中期目標の内容	評価指標	3年度目標値(5か年)	期間実績合計	元年度目標値	元年度実績	備考
5-2　地域との連携及び学術的な支援	博物館の資料をもとに、文化財保護や環境保全等に関する活動を学術的な側面から支援します。	支援件数	25件	31件	5件	14件	県文化財審議会1件、文化功労者選考1件、県RDB2件、市動植物調査2件、市文化財審議会1件、鹿沼市修復委1件、常陸大宮市博物館建設検討委1件、市アートを活かしたまちづくり検討委員1件、市歴史文化基本構想策定検討委員会1件大田原市史編纂委員2件、大田原市那須与一伝承館運営懇談会委員1件
5-3　学校教育との連携	自主団体との協働により、学校見学で来館する児童生徒に対して、展示案内・体験学習等を行います。	学校来館数(那須野が原博物館)	600校	270校	120校	80校	
		学校来館数(黒磯郷土館)	75校	31校	15校	9校	
	学校と連携して、博物館の資料を授業で活用します。また、要望に応じて職員や専門家を派遣します。	資料貸出件数	150件	64件	30件	34件	ビデオ23件、民具3件、開拓7件、その他1件
		出張授業件数	50件	27件	10件	9件	開こん記念祭7件 埼玉小2件
5-3　実習等の受け入れ	博物館実習や生徒の職場体験等を受け入れます。	博物館実習・職場体験件数	―	40人	―	16人	博物館実習5人、マイチャレンジ11人
【特記事項】	≪学校見学への対応≫ 博物館では主に小学3、4年生の見学を受け付け、石ぐら会と協働で実施した。黒磯郷土館では、小学3年生の見学を受け付け、いろりの会と協働で実施した。 ≪市民、自主団体による教育普及活動への支援内容≫ 石ぐら会「那須野が原入門講座」、いろりの会「昔のおもちゃづくり」、那須文化研究会「講演会」、那須野が原の自然調査会「ギャラリー展」、西那須野土器づくりの会「一般向け土器づくり教室」、語り部炉ばた「民話語り」、ジュニア生き物クラブの活動等						
【課題・改善点等】	学校見学は、市内の利用が前年同程度あったことに対し、市外の利用が少なかった。また新型コロナウイルス等感染症流行によるキャンセルも見られ、前年より一割程度の減となった。来年度は指導要領の改正があるため、内容に沿った体験活動を構築し、利用する学校の満足度向上、及び来館校増につなげたい。						
【外部評価委員 所見】	市民との協働については、エントランスの利用が市民に発表の場を提供することで、自主団体の支援に大きな役割を果たしている。さらには、博物館とし市民との協働とする姿勢が伝わるとともに、自主的な教育活動の推進にも貢献するものと思われる。 地域との連携及び学術的な支援については、地域との連携事業件数及び学術的な支援件数が前年を大きく上回り、博物館としての役割を果たすことができた。博物館のもつ資料や専門的な研究・知識等が市民に生かされることは大変望ましいことであり、学術的な側面から支援することは博物館の重要な活動の一つである。このような活動を広く市民に伝えるとともに、質的な充実を図っていただきたい。 学校との連携においては、学校での教育活動において体験的な活動は重視されており、体験のできる教育施設があることは大変重要である。来館した学校数が目標値に達しなかった理由としては、学校において学習内容が増加し見学等の時間が取れなくなったことが大きいと考える。学校の現状からすると来館する学校数の増加は難しと思われが、安全に配慮しつつ博物館ならではの質の高い学びが提供されるよう期待する。実習の受け入れについては良好であり、将来的に博物館に興味を持ってもらうことに結び付くもであり、その職に就かなかったとしても、意義を感じられる実習内容であったと思う。						
6. 施設の管理運営							
6-1　施設の維持管理	快適な環境の保全に努めます。	保安、清掃及び維持管理業務の実施、計画的な機器の修繕・更新					
6-2　危機管理体制の強化	防災訓練や救急救命講習等を実施し、危機管理体制の強化を図ります。	防災訓練の実施回数	10回	6回	2回	2回	
		救急救命講習の実施回数	5回	2回	1回	0回	
6-3　施設の整備	高齢者、障害者及び外国人等へ配慮した施設の整備に努めます。						英語版館内マップ作製 なはくルームの設営
6-4　収蔵施設の増設	収蔵庫の拡充を図り、収蔵資料の適切な保存に努めます。	収蔵庫の増設					実施なし

中期目標の項目	中期目標の内容	評価指標	3年度目標値(5か年)	期間実績合計	元年度目標値	元年度実績	備考
6-5 附属施設活動の充実	附属施設(黒磯郷土館・日新の館・関谷郷土資料館)の特徴を活かした活動を展開します。	黒磯郷土館来館者数	7,500人	4,497人	2,500人	1,516人	
		黒磯郷土館来館者の満足度(平均)	90%	97%	90%	97%	
		日新の館来館者数	8,000人	1,926人	1,600人	―	H31.3.31施設廃止
		日新の館来館者の満足度(平均)	90%	81%	90%	―	
		関谷郷土資料館来館者数	65,000人	26,011人	13,000人	―	H31.3.31施設廃止
		関谷郷土資料館来館者の満足度(平均)	90%	96%	90%	―	
6-6 組織運営	組織の適正な人員配置を行い、効率的な運営に努めます。						
6-7 意識改革と資質の向上	研修会等に積極的に参加し、職員の能力開発、資質向上に努めます。						
6-8 広報体制	各種メディア等への情報提供を積極的に行います。また、ホームページを充実し、認知度の向上を図ります。	マスコミ・メディア等の掲載回数	200回	98回	40回	23回	
		ホームページの閲覧回数	550,000回	449,988回	110,000回	128,950回	
6-9 博物館評価	使命、方針及び中期目標に基づいて評価を行い、博物館活動の改善に努めます。						

【特記事項】	旧日新の館は、現在博物館資料の一時的な仮収蔵施設として利用している。旧関谷郷土資料館内は、㈱アグリパル塩原へ市有財産使用許可の事務手続きを行った。施設の維持管理として、博物館の空調設備の修繕、監視装置のバッテリー交換などを実施した。また、博物館庭部の立木の伐採、剪定を行った。館内施設の利用率向上の一環として、体験学習室において簡易的なキッズスペース「なはくルーム」を設営した。収蔵施設の増設については、早期着工の要望を行っているが、実現にはいたっていない。
【課題・改善点等】	救命講習が未実施であった。来年度は新入職員等を対象に確実に実施する。施設設備については、展示室系統加湿器や冷温水発生器において経年劣化による大規模修繕が見込まれ、計画的な修繕の実施が求められる。また、新型コロナウイルス感染症の感染防止策や教室講座等実施方法を検討する必要がある。
【外部評価委員 所見】	黒磯郷土館の旧津久井家住宅については、毎年建物の劣化が著しく、予算的な問題もあって苦慮するところであるが、地域文化の継承や児童たちの生きた学習の場として活用するために、建物の保全管理が望まれる。那須野が原博物館は、平成16年4月開館から16年が経過、施設設備の経年劣化が各所に発生する時期であり、特に展示室系統加湿器や冷温水発生器の不具合については、博物館として最も重要な設備であることから、早急に予算措置を行い修繕に取組んでいただきたい。施設の防災訓練や救命講習は、いざという時の対応処置なので、毎年定期的に実施されることが望ましい。また、新型コロナウィルス感染症の感染防止策や教室講座等の実施方法について、具体的実施方法、ならびに危機管理体制の早急な確立に努められたい。

【外部評価委員　総合所見・指摘事項】

当協議会が提案した付属施設の統廃合がスムーズに行われ、かつ有機的に機能し始めたことはよろこばしい。各機関・関係者のご尽力に感謝申し上げたい。

さて、文化財保護法の改正による地域連携や地域活用に寄与する博物館機能の必要性が問われている。当博物館でも、日本遺産認定の中心施設として、また、「那須塩原市歴史文化基本構想」の策定を受けて、地域連携や教育普及活動に寄与する機会が増え地域資料の収集・保存・活用のニーズが高まるであろう。収蔵庫のスペース不足に伴う資料の安全な保存環境の確保や十分な予算措置を図られたい。

研究紀要の発行は、博物館の活動内容や研究成果を地域に知らしめる最も有効な方法である。地域資料の調査研究や地域文化の顕彰・記録のさらなる充実化を図られたい。

展示分野では、中長期的計画に沿って展示の狙いと目的を明確し、展示の意義や効果の整理・分析・検証をさらに高めていただきたい。

教室講座では、社会教育の普及や多様な生き方が広がる中、地域文化や地域意識の多様な変化に対応した講座や普及活動に努められたい。地域文化の顕彰や地域意識の向上を図る講座・普及活動であるならば、あまり、参加者数にとらわれなくてもよいのではないか。

各小中高等学校に地域連携教員制度があり、当館の誇りとする学校支援ボランティア「石ぐら会」があるにもかかわらず、学校教育との連携ははかばかしくない。教育委員会との協議・連携をさらに強化していただきたい。

那須野が原博物館も開館して15年を経過している。さらには、全世界的な自然環境の変動期にあって予測不可能な大災害が恒常的に起きる状況下、貴重な地域資料が失われる危機に瀕している。そのためにも、収蔵庫増設は急務である。さらに、職員の危機管理意識の向上を図るとともに、施設機能の保全や安全管理に努めていただきたい。

中期目標の項目	中期目標の内容	評価指標	3年度目標値(5か年)	期間実績合計	元年度目標値	元年度実績	備考

【博物館の対応】

現在、収蔵庫が飽和状態となっており、収蔵スペースが足りず支障が出ているが、新収蔵庫は財源確保の問題から早期の着手は難しくなっている。そのため、温湿度管理があまり必要でない資料を旧日新の館に移動するなど収蔵庫のスペース確保を行ったが、根本的な解決には至っていないことから、収蔵庫の建設は引き続き要望していきたい。調査・研究においては、紀要の発行を継続的に行うことで、資料の記録化を継続していくとともに成果を市民に還元することが重要と考えている。調査については、職員体制の面で組織化を図ることができないことから、各分野ごとに個々に進めている。

市民に直接的に関わる教育普及事業においては、事業ごとにアンケートを取り、その事業の評価と問題点を抽出し、「事業別自己評価票」を作成し、さらに、この評価シートに反映させている。展示事業においては、企画展の観覧者数は、目標値を超えているが、今後もテーマの設定や展示内容の精査・市民ニーズを捉えながら開催していくことで充実を図っていきたい。教室・講座等の事業においては、子ども向けの教室は、体験・実験・観察を取りいれての事業展開であり、多くの申し込みがあり評価されているが、一般向けの講座等では受講生が少ない。他の施設での開催も含め多様化していることも確かであるが、事業のやり方を工夫したり、新たな広報の方法を開拓することも心掛けて行きたい。また、美術の定着を目指し、美術作家と美術の親しむワークショップ「なはくアートプロジェクト」については、実施回数を増やし実施することができたが、今後は内容の充実や講師の開拓を進めていきたい。

博物館は市民との協働を推進しているが、行政の補完であってはならないと考える。博物館関連団体の中には活動が困難となっている団体が出ており、業務の改善・工夫で乗り切って行くほかないが、今後の対応等が急務となってきている。さらに、見学に来る学校数は、増加の見込みはなく厳しい状況にあるので、学校との連携を進めるとともに見学対応の中身も充実させていく必要がある。

博物館は、資料の収集・保存・調査・研究・教育普及活動と幅広い活動領域で、市民の皆様に目に触れない部分も多く存在する。そのためにも、この博物館評価を実施することで、少しでも理解が図れるようにするとともに、市民との協働を標榜する博物館として、情報の共有を図る目的もある。

外部評価委員
令和2年度那須塩原市那須野が原博物館協議会委員

相澤　圭子	磯　　恵美
高根沢広之	後藤　英雄
木村　康夫	川島　勝子
杉田　智生	松村　　雄
千葉　昭彦	君島　章男